

# 松原遺跡(6)

—国道403号線東寺尾交差点改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2015年10月

長野市教育委員会



## 序

2020年に東京オリンピックが開催されることが決まり、その準備が着々と進められているところと推察いたしますが、思い返せば長野市において熱戦が繰り広げられた長野オリンピックから、もうすぐ17年の月日が経とうとしています。1991年に開催都市が長野市に決定してから、高速道路や新幹線の開通、会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした劇的な変化の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

本書に所収しております松原遺跡は、当市松代町東寺尾地区に所在する縄文時代から平安時代、中世に至る複合遺跡であり、特に弥生時代中期においては東日本を代表する巨大な集落遺跡として有名です。これらは1990年頃に盛んとなった上信越自動車道の建設や周辺道路の改良、その他開発工事に先立つ発掘調査によって得られた研究成果です。このたび長野県長野建設事務所において1991年に調査した道路に接続する交差点の改良工事を行うことになり、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。ここに長野市の埋蔵文化財第141集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対する深いご理解と発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました長野県長野建設事務所の皆様、実際の作業にあたりご理解・ご協力を賜りました調査地近隣の皆様、発掘作業に携わっていただきました発掘作業員の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援・ご指導賜りました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

2015(平成27)年10月



長野市教育委員会  
教育長 近藤 守

# 例 言

- 1 本書は、「国道403号線東寺尾交差点改良事業」に伴う「松原遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県長野建設事務所長 小林睦夫（平成26年度）及び山岸勸（平成27年度）と、長野市長加藤久雄との間で締結された「埋蔵文化財発掘調査協定書」及び各年度毎の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが実施した。委託事業名は以下のとおりである。  
平成26年度：平成26年度防災・安全交付金（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託  
平成27年度：平成27年度防災・安全交付金（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託  
履 行 場 所：(国) 403号 長野市 柴～東寺尾（1）
- 3 調査地は、長野県長野市松代町東寺尾字高畑3514番2外 に所在する。調査面積は240㎡である。
- 4 発掘調査は、平成26年8月4日から平成26年10月10日にかけて実施した。また、整理調査及び報告書刊行に至る業務は平成27年度に行った。
- 5 遺跡名の「(6)」は、長野市教育委員会が松原遺跡の報告書を発行する順による。ちなみにⅠが長野南農業協同組合集出荷場施設建設地点（長野市の埋蔵文化財第40集）、Ⅱが市道松代東111号線道路改良地点（同第51集）、Ⅲが主要地方道中野更埴線道路改良地点（同第58集）、Ⅳが市道松代東63号線道路改良地点（同第63集）、ⅤがJA長野県経済連LPガス充填所建設地点（同第92集）である。
- 6 発掘調査及び本書の作成は、清水竜太・日下恵一が担当し、埋蔵文化財センター職員の応援を得た。本書の執筆は、第Ⅰ章を飯島哲也、第Ⅲ章第1節を清水、第Ⅲ章第2節を清水・日下が分担し、第Ⅱ章については『松原遺跡Ⅴ』（長野市教育委員会1998）所収分を加筆修正した。
- 7 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、本調査の略記号は「MMKS」である。

# 凡 例

本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

- 1 本書では、検出された遺構のうちで時期・性格等が明らかなものを中心に報告した。なお、隣接する主要地方道中野更埴線道路改良地点E区と本調査地で同一遺構が検出されている場合は、両地点の出土遺物を対象に掲載遺物の抽出を行った。
- 2 図中に示した方位は、地図は真北、遺構実測図等は座標北を表している。なお、磁北は真北より西へ約7°00'の偏差がある。
- 3 基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系の第Ⅷ系（東経138°30'00"、北緯36°00'00"）の座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高を基準とし、株式会社 写真測図研究所の開発した遺跡調査支援システム「A T S」のうち、光波測距儀を用いた「コーディック・システム」を援用するため、同所に委託した。
- 4 遺構名は、種別ごとに下記の略記号を用いて通し番号を付した。  
 竪穴住居跡…S A、土坑…S K、溝…S D、小穴…S P
- 5 遺構実測図は、1/20で作成した原図をもとに、竪穴住居跡・溝1/80、土坑1/40で掲載した。
- 6 遺物実測図は、原寸で作成した原図をもとに、土器1/4、土器拓影1/3、石器1/2で掲載した。
- 7 遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 土器実測図において、断面の網掛けは灰釉陶器・磁器を表す。また、内外面のは赤色塗彩、は黒色処理の範囲を表す。

# 目次

第Ⅰ章 調査の経過	1	第Ⅲ章 調査成果	9
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査概要	9
第2節 発掘調査の経過	2	(1) 基本層序	9
第3節 調査体制	3	(2) 各遺構面の概要	10
第Ⅱ章 遺跡の環境	4	第2節 遺構と遺物	14
第1節 地理的環境	4	(1) 弥生時代の遺構と遺物	14
第2節 松原遺跡発掘調査歴	5	(2) 平安時代の遺構と遺物	18

## 挿図目次

図1 調査地位置図	1	図12 弥生時代遺構外出土遺物実測図(1)	16
図2 松原遺跡位置図	4	図13 弥生時代遺構外出土遺物実測図(2)	17
図3 松原遺跡発掘調査地点	8	図14 S A 1 実測図	18
図4 基本層序柱状模式図	9	図15 S A 1 遺物実測図(1)	18
図5 1次面全体図	10	図16 S A 1 遺物実測図(2)	19
図6 2次面全体図	11	図17 S A 2 実測図	19
図7 3次面全体図	12	図18 S A 2 遺物実測図	20
図8 S K 3 実測図	14	図19 S D 1 実測図	20
図9 S K 3 遺物実測図	14	図20 S D 1 遺物実測図	20
図10 S D 3 実測図	15	図21 平安時代遺構外出土遺物実測図	21
図11 S D 3 遺物実測図	15		

## 表目次

表1 遺構一覧表	13	表3 石器観察表	23
表2 土器観察表	22		

## 写真目次

写真1 1次面表土掘削作業(8月11日)	2	写真4 3次面遺構測量作業(9月30日)	2
写真2 1次面遺構掘削作業(8月27日)	2	写真5 松原遺跡遠景	7
写真3 3次面遺構検出作業(9月19日)	2	写真6 弥生時代中期包含層土器出土状況	16

## 写真図版目次

図版1 1次面全景(南西より)／2次面全景(南西より)	2完掘(南より)／S D 1完掘(東より)／S D 1土層断面(東より)
図版2 3次面全景(南西より)／調査区東壁土層断面(西より)	図版4 S K 3出土遺物／S D 3出土遺物／弥生時代遺構外出土遺物(1)
図版3 S K 3完掘(南東より)／S D 3完掘(南より)／3次面弥生時代中期遺構群(北より)／2次面奈良時代末～平安時代中期遺構群(西より)／S A 1完掘(南より)／S A	図版5 弥生時代遺構外出土遺物(2)／S A 1出土遺物／S D 1出土遺物／平安時代遺構外出土遺物

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

上信越自動車道建設工事を契機として周辺道路の改良工事が活発化し、長野市松代町東寺尾地区において主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う松原遺跡の発掘調査が行われたのは平成 2～4 年度のことである。高速道路が開通した 1993（平成 5）年には主要地方道中野更埴線が廃止され国道 403 号線の一部となり、現在では北信濃口マン街と称する千曲川右岸地域の主要な観光路線としての役割も果たしている。2012（平成 24）年 3 月 31 日、長野電鉄屋代線（須坂～屋代駅間）廃止を契機として、市道松代東 280 号線との交差点部分について廃線路敷を利用した改良工事が計画された。事業主体である長野県長野建設事務所からの埋蔵文化財に関する照会の初見は 2013（平成 25）年 10 月 22 日に遡る。事業地は、平成 3 年度に実施した発掘調査地（E 区）の隣接地であり遺構の存在は明白であったため、保護協議を重ねた結果、廃線路敷を中心とする新規拡幅部分について記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。なお、未調査地である旧市道部分と既存国道の一部は工事立会いとして現状を保存している。平成 26 年 3 月 26 日付 25 長建第 461 号で文化財保護法第 94 条の規定に基づく通知書が提出され、同年 3 月 31 日付 25 埋第 3-72 号で保護措置「発掘調査」を勧告し、平成 26 年度は現地における発掘調査、翌 27 年度は整理調査を行う計画の「埋蔵文化財発掘調査協定書」を同年 5 月 16 日付で締結した。各年度毎に契約した委託契約書に基づいて調査を実施し、成果物として本書を刊行した。

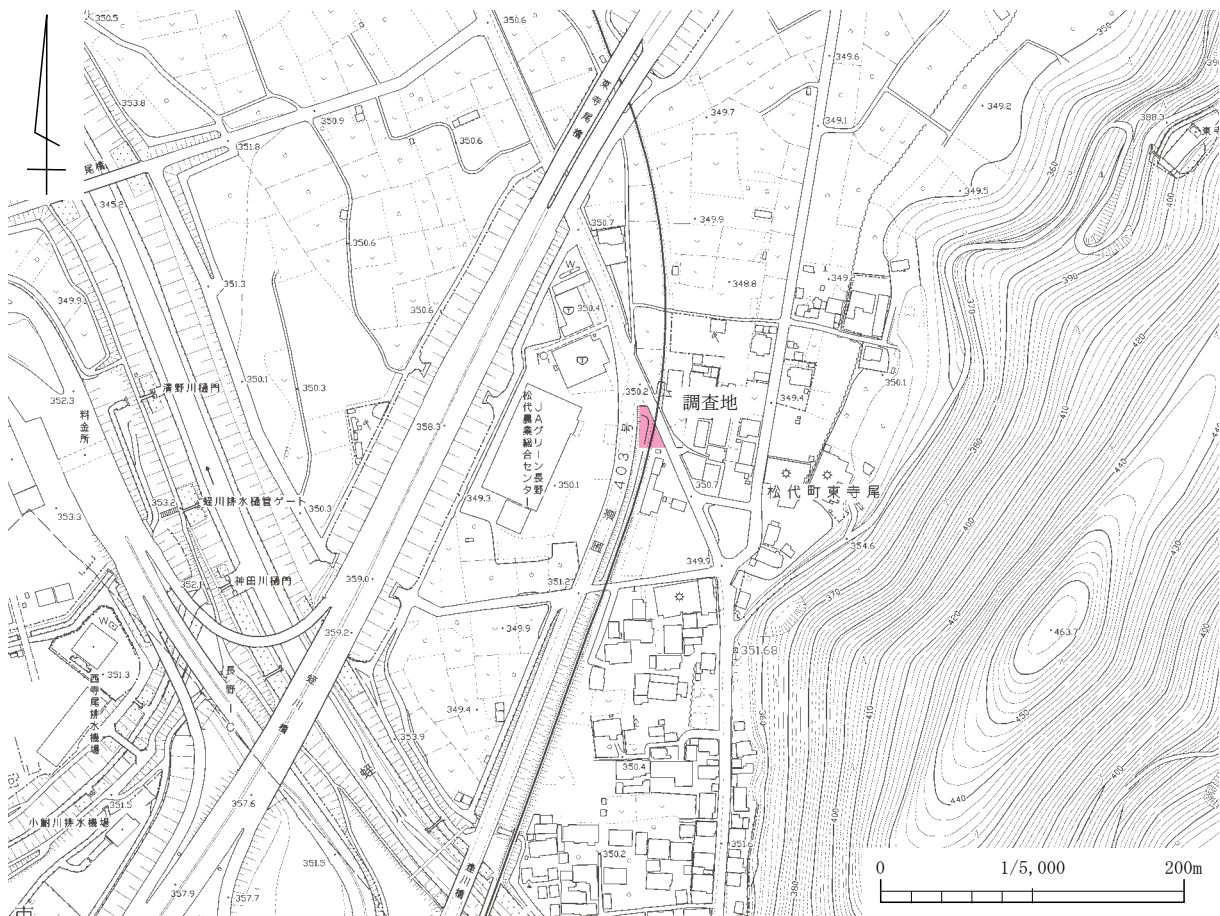


図 1 調査地位置図

## 第2節 発掘調査の経過

- 8月4日（月） 現場養生、安全設備設置（～9日）。
- 8月8日（金） 機材搬入。
- 8月10日（日） プレハブ設置。
- 8月11日（月） 表土重機掘削（～12日）。
- 8月18日（月） 作業員雇用開始。1次面調査開始。壁面清掃、側溝トレンチ掘削（～19日）。
- 8月20日（水） 遺構検出（～22日）。
- 8月25日（月） 遺構掘削（～9月1日）。
- 9月2日（火） 清掃、全体写真撮影。航空写真撮影（委託）。
- 9月3日（水） S D 1 断面図作成、遺構写真撮影。
- 9月5日（金） 遺構測量（委託）。
- 9月8日（月） 結線。
- 9月9日（火） 重機掘削。2次面調査開始。遺構検出（～10日）。
- 9月10日（水） 遺構掘削（～11日）。
- 9月11日（木） 清掃、全体写真撮影。遺構測量（委託）。
- 9月12日（金） 結線。
- 9月16日（火） 重機掘削。3次面上層調査開始。遺構検出（～17日）。
- 9月17日（水） 遺構が存在しないことを確認。側溝トレンチ掘削。
- 9月18日（木） 清掃、全体写真撮影。包含層遺物出土状況写真撮影。
- 9月19日（金） 重機掘削。3次面調査開始。遺構検出（～22日）。
- 9月22日（月） 遺構掘削（～24日）。
- 9月24日（水） S D 3 遺物出土状況写真撮影。
- 9月26日（金） 調査区壁面分層。
- 9月29日（月） 清掃（～30日）、遺構写真撮影。
- 9月30日（火） 全体写真撮影、航空写真撮影・遺構測量（委託）。作業員雇用終了。プレハブ撤去。
- 10月1日（水） 結線。機材搬出。
- 10月6日（月） 埋め戻し（～10日）。

整理作業は、現地作業終了後の平成27年度より開始し、10月の発掘調査報告書の刊行に至る。



写真1 1次面表土掘削作業（8月11日）



写真2 1次面遺構掘削作業（8月27日）



写真3 3次面遺構検出作業（9月19日）



写真4 3次面遺構測量作業（9月30日）



### 第3節 調査体制

本調査は、長野市教育委員会の直轄事業として文化財課埋蔵文化財センターが実施した。その組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	堀内 征治（平成26年度）、近藤 守（平成27年度）
統括管理者	文化財課	課長	青木 和明
調査責任者	埋蔵文化財センター	所長	小山 敏夫
		（庶務）係長	竹下 今朝光
		職員	大竹 千春
		（調査）係長	飯島 哲也（調査担当者）
		係長	風間 栄一
		主査	小林 和子
		専門員	田中 暁穂・日下 恵一（調査員）・清水 竜太（調査員）・ 遠藤 恵実子・柳生 俊樹・高田 亜紀子・篠井 ちひろ
調査補助員	井手 稜・藤丸 亮介（専修大学院生）		
発掘作業員	大日方 東・北村 雄二・坂口 修二・坂田 彰一・清水 勇・鈴木 延雄・宮入 久子・山崎 孝之		
整理調査員	青木 善子・鳥羽 徳子・武藤 信子		
整理事業員	清水 さゆり・関崎 文子・西尾 千枝・待井 かおる・三好 明子		
遺構測量委託	株式会社 写真測図研究所 代表取締役 杉本 咲子		
重機等賃貸借	株式会社 大松建設 代表取締役 村田 重雄		

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

調査地の西側を流れる千曲川は、上流の坂城町で長野盆地に流入し、千曲市で流路を北東に転じる。犀川との合流点まで蛇行しながら流下し、その後直線的な流れとなって中野市境に至ると、流出口として先行性峡谷を経て飯山盆地に至る。この間直線距離約25km に対して高度差は僅か20m にすぎない。犀川の堆積土に押され東部山地の山裾を縫うように流下するものの、流路攻撃面には河食崖をつくり堆積面には顕著な自然堤防と後背湿地を形成する。地形的には直線的に流下して水勢の強い犀川に対して、緩やかに蛇行する千曲川がつくり出した複雑な山麓線は、まるでリアス式海岸の様相を想起させる。

1752(宝暦2)年、松代城から北へ約1km 遠ざけ、蛇行を小さくした現在の流路を開削する以前の千曲川は、松代城の北側から象山離山・愛宕山先端を通して東寺尾の山沿いを流れており、現在では本調査地より北東側の地形の落ち込みと、北に位置する柴地籍の河跡湖金井池の存在によって辛うじてその痕跡を読み取ることができるといえる。この千曲川旧流路は自然堤防の形成により後背湿地となり、清野・大室地籍では水田や一部に蓮田として土地利用されている。また、長野市域における千曲川右岸の自然堤防上には、上流部から四ツ屋遺跡・松代城北遺跡・松原遺跡・牧島遺跡・町川田遺跡・綿内遺跡群等が展開している。

松原遺跡も松原自然堤防の一角に所在する。『長野市表層地質図』によると、旧千曲川流域及び松原自然堤防は砂と礫の氾濫原堆積物が表出しており、県道中野更埴線(現国道403号線)道路改良事業に伴う発掘調査においてJ区で検出された礫層面は、地表面からの深浅にかなりの差を有しながらも広く東寺尾地籍に展開しているものと思われる。

1993(平成5)年に上信越自動車道が開通するまで、松原自然堤防上一帯は長芋栽培や巨峰などの果樹栽培が盛んな畑作地帯であった。高速道路の開通を契機に周辺道路が整備され、農協の集出荷場やLPガスステーション等の大型施設が建設され、近年では新斎場施設の建設も始まった。また、国道403号線沿線にはガソリンスタンドや店舗等の民間施設が徐々に進出しつつあり、松原地籍における土地利用は大きく変貌しつつある。

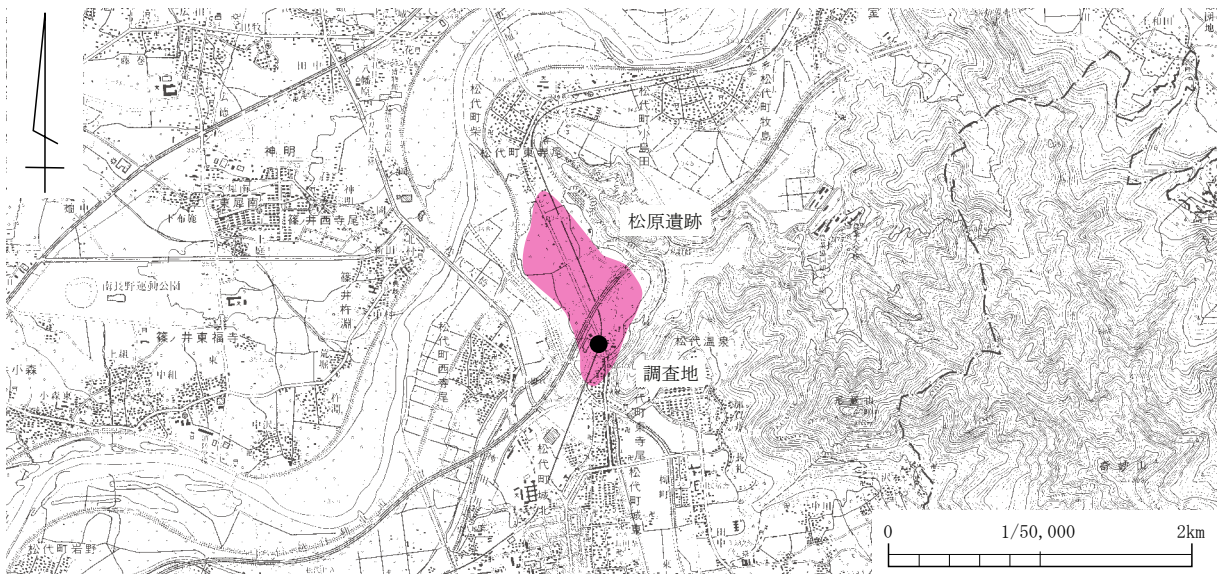


図2 松原遺跡位置図

## 第2節 松原遺跡発掘調査歴

松原遺跡は松代町東寺尾地籍に所在し、金井山と西側に流れる蛭川との間に展開する自然堤防上の遺跡である。しかし、千曲川の氾濫原でもある当地はその都度地形の変化が著しかったものと判断され、各時代においてもこの地形変化に影響を受けたものとみられる。そのため遺跡の占地や遺構の密集度に大きな差異が認められる。

本遺跡は古くから弥生時代以降の複合集落遺跡として周知されており、遺物の散布状況からその規模は大きいものと予想されてきた。上信越自動車道が遺跡の中央付近を横断し、その影響もあって周辺の関連開発事業も活発となり、これまでに多くの緊急発掘調査が実施されてきた。

以下、事業地点毎に記載する。番号は「図3 松原遺跡発掘調査地点」と一致する。

### 1 上信越自動車道地点—高速道地点—（財長野県埋蔵文化財センター1998・1999・2000）

平成元年度より3年度にかけて発掘調査が財長野県埋蔵文化財センターにより実施された。その結果縄文時代前期から中世に至る複合遺跡であることが明らかになった。調査では各時代の竪穴住居跡を中心に多くの遺構が検出された。竪穴住居跡は縄文時代前期中葉2軒・前期後半2軒・前期末～中期初頭22軒・中期末葉～後期前葉7軒、弥生時代中期後半240軒、弥生時代後期中葉22軒、古墳時代前期7軒、奈良・平安時代408軒など総数710軒におよぶ。縄文時代は前期中葉から後期前葉の集落で、住居跡のほか土坑や焼土跡、多数の小穴による柵状遺構も検出され、今後の研究に一石を投じそうである。遺物には、前期中葉の有尾式土器や前期末葉から中期初頭に至る各土器型式に相当する良好な土器及び石製装飾品がある。弥生時代中期後半の大集落は、断面V字を呈する大溝に囲まれたいわゆる環濠集落である。磨製石戈3点・磨製石剣5点を含む多量の武器形石器の出土から、この集落が政治的緊張状態にあったことを窺わせるものとして注目される。出土した土器についても充実しているほか、竪穴住居跡及び囲郭溝から5例の人面付土器が出土し、儀礼的な行為との関係が注目される。なお、調査区の中央（国道403号線と高速道が交差する付近）では26基の礫床木棺墓を主体とする4群の木棺墓群が検出されている。弥生時代後期と古墳時代前期にも小規模ながら集落が展開する。また、遺跡東側の金井山山麓から古墳時代後期の松原1号墳を含む3基の古墳が発見され、当該期の住居跡等は確認されていないが周辺に小規模な集落の存在が予想される。再び大規模集落が形成されるのは奈良・平安時代に至ってからである。集落は、7世紀から12世紀まで継続する。その中心は10世紀で集落数のピークを迎える。特記遺物に、梵鐘・磬・扉金具の鋳型など仏具の鋳造関係資料や、住居跡から出土した鹿角製のサイコロがある。中世は主だった遺構は観察しえないものの、土葬墓や井戸跡のほか曲物に納められたと思われる火葬骨・五輪塔等が金井山山麓の傾斜面から集中して発見されている。

### 2 長野南農業協同組合集出荷場施設建設地点—農協地点—（長野市教育委員会1991）

平成2年度に発掘調査を実施し、弥生時代中期後半と平安時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期後半は住居跡26軒のほか多くの遺構が確認されている。3次面25号住居跡床面からは石戈が1点出土している。また、高速道地点で検出され、本地点においてもその一角が確認された河川跡は、弥生時代中期後半には集落内を蛇行して横切り、集落が分断した形になる。高速道地点では環濠もこの河川跡を一部利用して巡らされているが、当調査地点では確認されない。奈良・平安時代の住居跡は35軒検出した。2次面（平安時代前半）33号住居跡から出土した土師器と須恵器の杯底部に同一の刻印が押されていた。このことは土師器と須恵器を同じ集団が製作し

ているという可能性を示すもので、今後当該期における土器製作集団の在り方を考える上で良好な資料といえる。

### 3 主要地方道中野更埴線道路改良地点—県道地点—（長野市教育委員会1993）

平成2年度から4年度にわたり発掘調査を実施した。遺跡の東から南に弧を描きながら横断する調査区になる高速道地点に対し、この県道は南北に縦断する形で調査され、これによって遺跡の範囲がほぼ確定したといえる。高速道長野ICに接続する新設道路（バイパス）については最大幅18mを確保できたことから遺構の検出件数も多いが、既存道路の拡幅部分に関しては幅5m前後の調査しか行えなかった。そのため遺構全体を把握できた例は少ない。弥生時代中期後半は住居跡51軒・環状溝跡13基・土壙墓1基等を確認した。環状溝跡は松原遺跡内において普遍的に存在する円形状に巡る溝状遺構で、その区画内には多数の小穴、中央付近には炉跡と思われる焼土も確認されている。平地式の住居跡と考えられている。土壙墓は骨の残存状態はあまり良くないものの胸部肋骨に接して基部の折れた石鏃が1点出土した。高速道地点で記したように弥生時代中期後半の松原遺跡が政治的に緊張状態にあったとの想定のもとに、戦乱による犠牲者の墓の可能性がある。古墳時代では後期の住居跡を2軒検出した。後述する松代東111号線地点の調査で4軒の住居跡が確認されており、周辺に小規模な集落の存在が予想される。ただし、松原1号古墳との関係は今のところ不明である。奈良・平安時代の住居跡は36軒確認されている。特筆すべき遺構としては精錬炉状遺構が10基まとまって検出され、内部から炉内滓や流動滓のほか鍛冶羽口・ブイゴ羽口などが出土した。10世紀前半から中頃の所産と思われる。

### 4 市道松代東111号線道路改良地点—松代東111号線地点—（長野市教育委員会1993）

平成2年度と3年度に発掘調査を実施した。遺構面は3面あり、上層から奈良・平安時代及び中世面、古墳時代後期面、弥生時代中期後半面である。弥生時代住居跡は他の調査地点よりも密集度が低く7軒検出したにすぎなく、調査地が遺跡の西端付近に位置するものと思われる。この他古墳時代の住居跡4軒、奈良・平安時代住居跡13軒、中世土坑を検出した。この内21号住居跡は奈良時代の所産で、煙道先端部を除きほぼ完掘できた焼失住居跡である。特記遺物に占骨・ガラス製丸玉がある。

### 5 松代斎場周辺環境整備事業地点—松代斎場地点—（長野市教育委員会1993）

平成3年度に発掘調査を実施したが、明確な遺構の検出に至らなかった。遺物の出土量も僅少であり、旧千曲川の流路上に位置するものと想定されることから松原遺跡の集落外と思われる。

### 6 市道松代東63号線道路改良地点—松代東63号線地点—（長野市教育委員会1994）

平成4年度・5年度に発掘調査を実施した。調査起因が道路改良ということで調査幅3m前後の狭長なものであるため、遺構全体を露呈できたものは少ない。ただし、調査地は松原遺跡の東端付近を南北に調査したため遺跡の内容が徐々に判明してきたといえる。周辺の調査地点と比較すると遺構の密集度は高くない。調査で確認された遺構は、弥生時代中期後半住居跡7軒・土坑2基・溝跡13条、平安時代住居跡1軒・井戸跡5基及び溝跡・土坑等があるにすぎない。弥生時代では集落の東側の外れに位置するものと思われ、平安時代においては旧千曲川の氾濫における地形変化が幾度となく繰り返された反映として無遺構地域になったものと推定される。

### 7 市道松代東259号線道路改良地点—松代東259号線地点—（長野市教育委員会1996）

平成6年度に発掘調査を実施した。平安時代前期の遺物包含層と溝3条等を検出したのみで、これより東側は

蛭川旧河川の流路、寺尾の山地となり遺構は存在しない。松原遺跡の東側周縁部にあたると考えられる。

### 8 JA長野県経済連LPガス充填所建設地点—LPガス地点—（長野市教育委員会1998）

平成8年度・9年度に発掘調査を実施した。調査地は遺跡北東部に位置し、北側のB区・東側のD区ではおよそ100m北に位置する松代斎場地点と同様の調査結果であった。しかし西側のA区・南側のC区では弥生時代中期後半と平安時代前期の2面にわたる遺構面が確認され、弥生時代中期後半では住居跡9軒・環状溝跡9軒・掘立柱建物跡7棟・溝跡8条・土坑20基・小穴等、平安時代前期では住居跡4軒・溝跡1条・土坑4基・小穴等を検出している。このことより、調査地は遺跡の北限に位置しているとみられる。

### 9 長野市松代新斎場建設地点—松代新斎場地点—（長野市教育委員会2014）

平成25年度に発掘調査を実施した。想定された古代の遺構面は確認されず、弥生時代中期後半の遺構面より住居跡25軒・溝跡7条・土坑41基・小穴等を検出している。調査区北側からは蛭川の旧河道が確認され、高速道地点～松代新斎場地点～LPガス地点に繋がる正確な流路が明らかになった。調査区南側からは想定を上回る住居跡が確認され、蛭川旧河道際まで集落域が広がっていたことが確認された。遺物については、確認された遺構に対して僅少といえるが、その中には完成間近の石斧や石器製作に使用された砥石が含まれており、松原遺跡で石器製作の仕上げを行っていたことを裏付ける資料といえる。



写真5 松原遺跡遠景

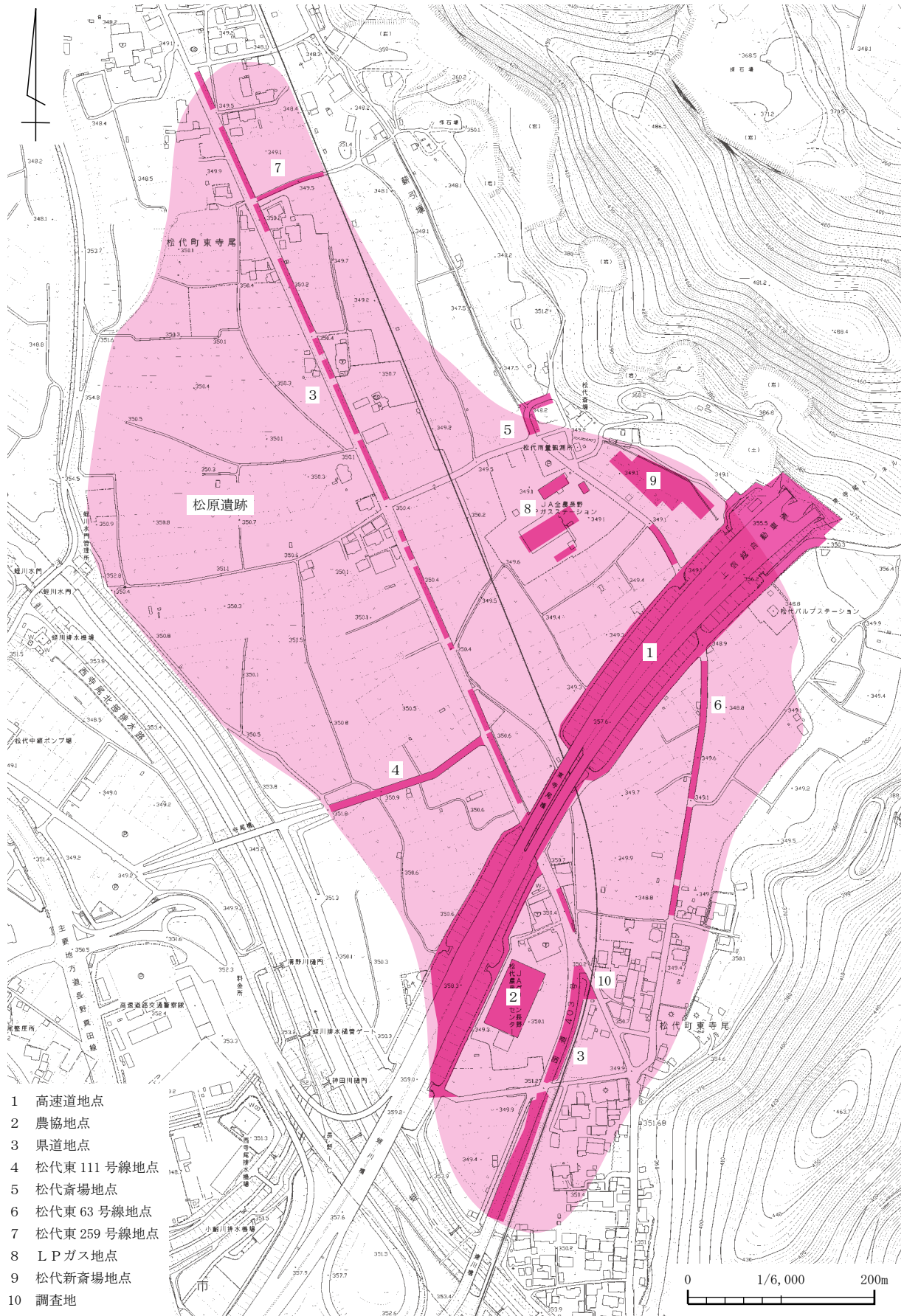


図3 松原遺跡発掘調査地点

# 第三章 調査成果

## 第1節 調査概要

### (1) 基本層序

調査地周辺では、約80m西で農協地点、西に接して県道地点E区（以下地区名は省略）の調査が行われ、共通した基本層序が提示されている。今回の調査を行うに当たっては、この成果を援用して検出面の設定を行い、土層確認のための事前調査は実施しなかった。しかし、調査の結果それまでとは異なる様相が明らかになり、ここで改めて本調査地と農協地点と対比して相違点を確認しておくことにする。本調査地における基本層序の確認は、近現代の攪乱の影響が少ない東壁北部で行った。

i層・ii層は遺跡が形成されて以降に堆積した人為層である。農協地点の表土である耕作土とは対応しない。線路が通っていた調査区の中央では、i層を掘り込んでバラストが厚く敷かれていた。ii層は場所により2～4層に細分されるが、いずれも線路や道路の敷設に伴う客土や攪乱土であり、造成土として一括した。

iii層は平安時代の遺物を少量含む包含層で、農協地点II層に対応する。本調査地では農協地点と比較して層厚が薄く、近現代の造成に伴い多くが削平されたとみられる。下層のiv層は農協地点III層と対応する1次面のベース面で、農協地点で平安時代中期、県道地点で古代・中世に比定されている。本調査地においても平安時代中期の遺構を検出しており、同時性が確認される。

v・vi層は平安時代の遺物をごく少量含む包含層で、漸移層の農協地点IV層を分層したものとみられる。下層のvii層は農協地点V層に対応し、上面が2次面の検出面となる。農協地点で奈良時代末から平安時代初頭、県道地点で奈良時代末から平安時代中期に比定される。県道地点で時期幅が広く捉えられているのは、地形の落ち込みにより1次面の遺構が検出されたためである。本調査地では遺物量が極めて少なかったことから、県道地点と同じ時期幅を想定しておくこととする。

viii～x層は栗林式土器を含む弥生時代中期の包含層である。viii・ix層の区分は場所により不明瞭で漸移層的なあり方である。3層を合わせた層厚は、北側で50cm、南側で30cmであり、北から南へ次第に薄くなっていく。農協地点との対応関係であるが、まずviii・ix層は、土層注記からVII層の漸移層を分層した可能性が高い。同じ2次面直下に位置する農協地点VI層については、弥生時代後期から古墳時代前期の包含層と推定されており、同時期の高速道地点IV層と同一土層と思われる。本調査地では対応土層は存在せず、該期の土器の出土もない。x層については、比較的明確に認識できるものの農協地点・県道地点に記載がなく、本調査

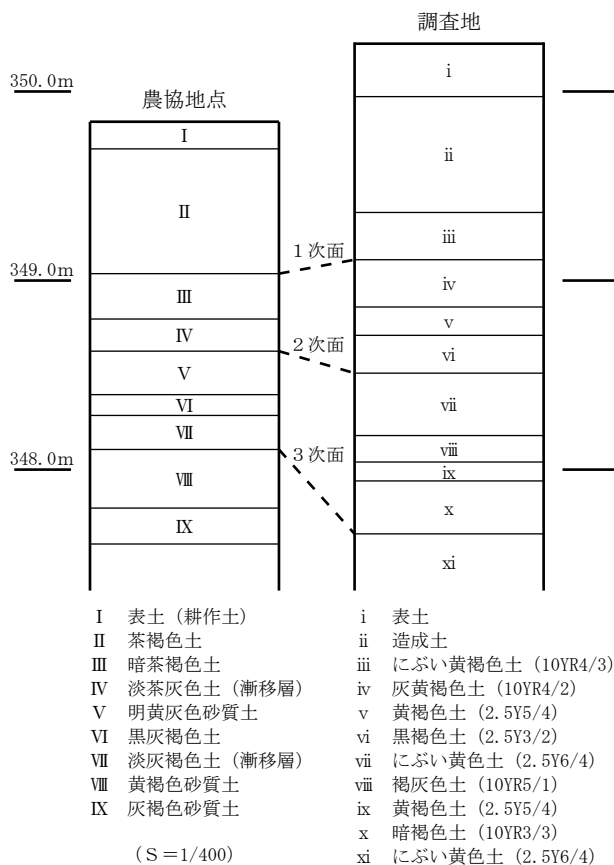


図4 基本層序柱状模式図

地を中心とした限られた範囲に存在している可能性がある。

最下層のxi層は3次面のベース面であり、県道地点Ⅷ層と対応する。時期は弥生時代中期である。なお県道地点では、Ⅷ層で検出された環状溝跡（いわゆる平地式建物跡）の焼土痕が遺構面より上位から検出されていることが報告されており、今回の調査では黄色を帯びるix層上面での遺構検出を3次面の調査に先立って実施している。調査の結果、土器は比較的出土するものの遺構は認められず、遺構面の認定は見送っている。

## (2) 各遺構面の概要

### 1次面の概要

標高349m付近に展開する平安時代中期の遺構面である。遺構の内外で土質の差が小さいうえに遺構面を掘り込む攪乱が多くあり、遺構の検出は困難であったが、竪穴住居跡2軒・溝1条を検出している。このうち、SA

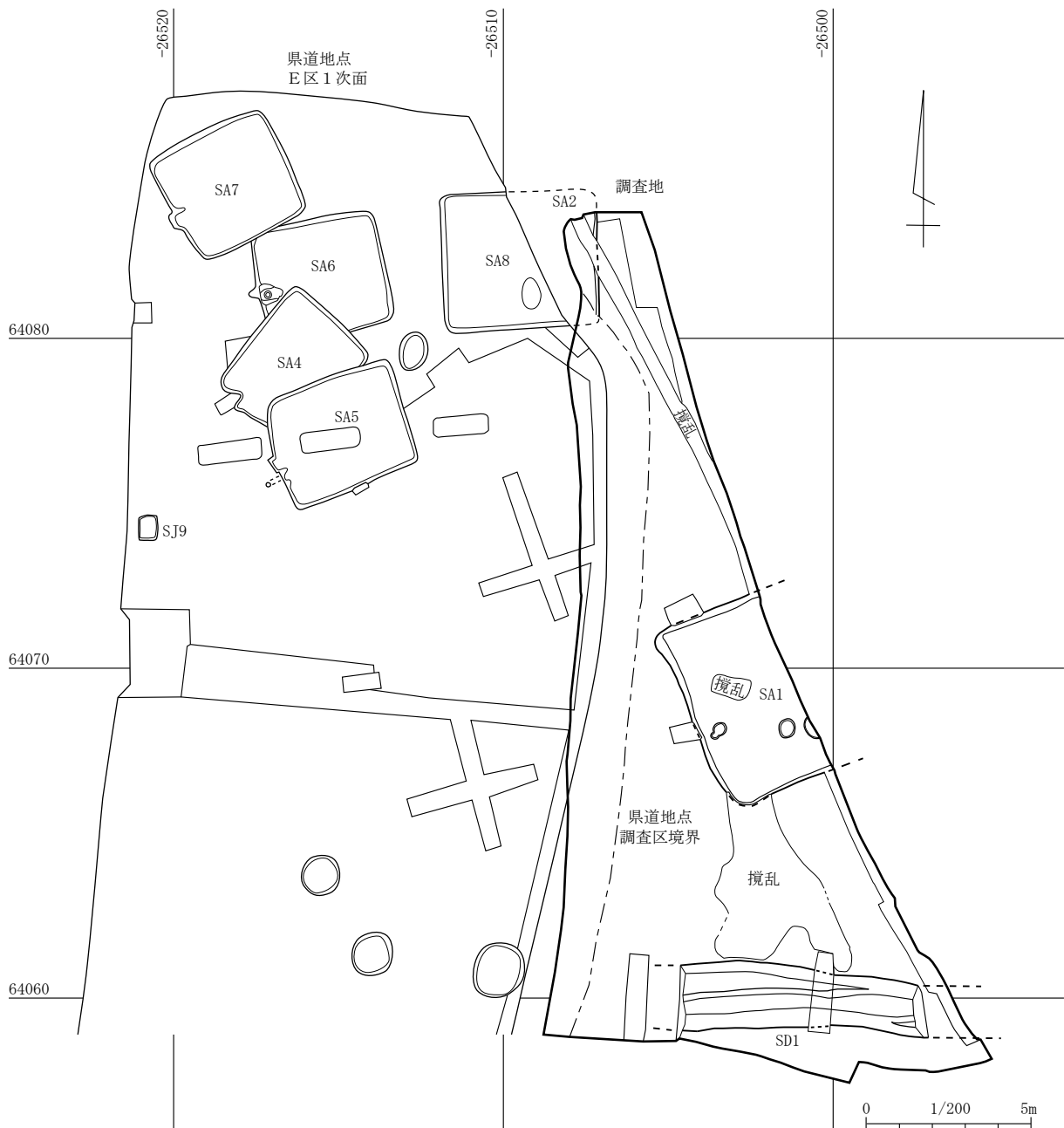


図5 1次面全体図



2は県道地点1次面SA8、SD1は同2次面検出溝（調査時名称SD2、詳細未報告）と同一遺構である。SA1・SD1は調査区外へ延びているものの、調査地の東150mの愛宕山の山麓線沿いには埋没河川の存在が予想され、調査地から東側へ集落がさらに展開していくことは考えにくい。

出土遺物の中ではSA1から出土した丸瓦が特に注目される。瓦の出土は、古代の遺構・遺物がこれまで多く確認されている本遺跡でも初めてのことである。わずか1点の出土で外部から持ち込まれた可能性もあるが、一般的に古代の瓦は寺院などの特殊な施設で使用されており、高速道地点では同じ仏教関係遺物として梵鐘・磬・扉金具の鋳型が鍛冶遺構から出土していることから、周辺にそうした遺構が存在した可能性を今後は考慮しておく必要があると思われる。

## 2次面の概要

標高348.5m付近に展開する奈良時代末から平安時代中期の遺構面である。土坑1基・溝1条・小穴4基を検

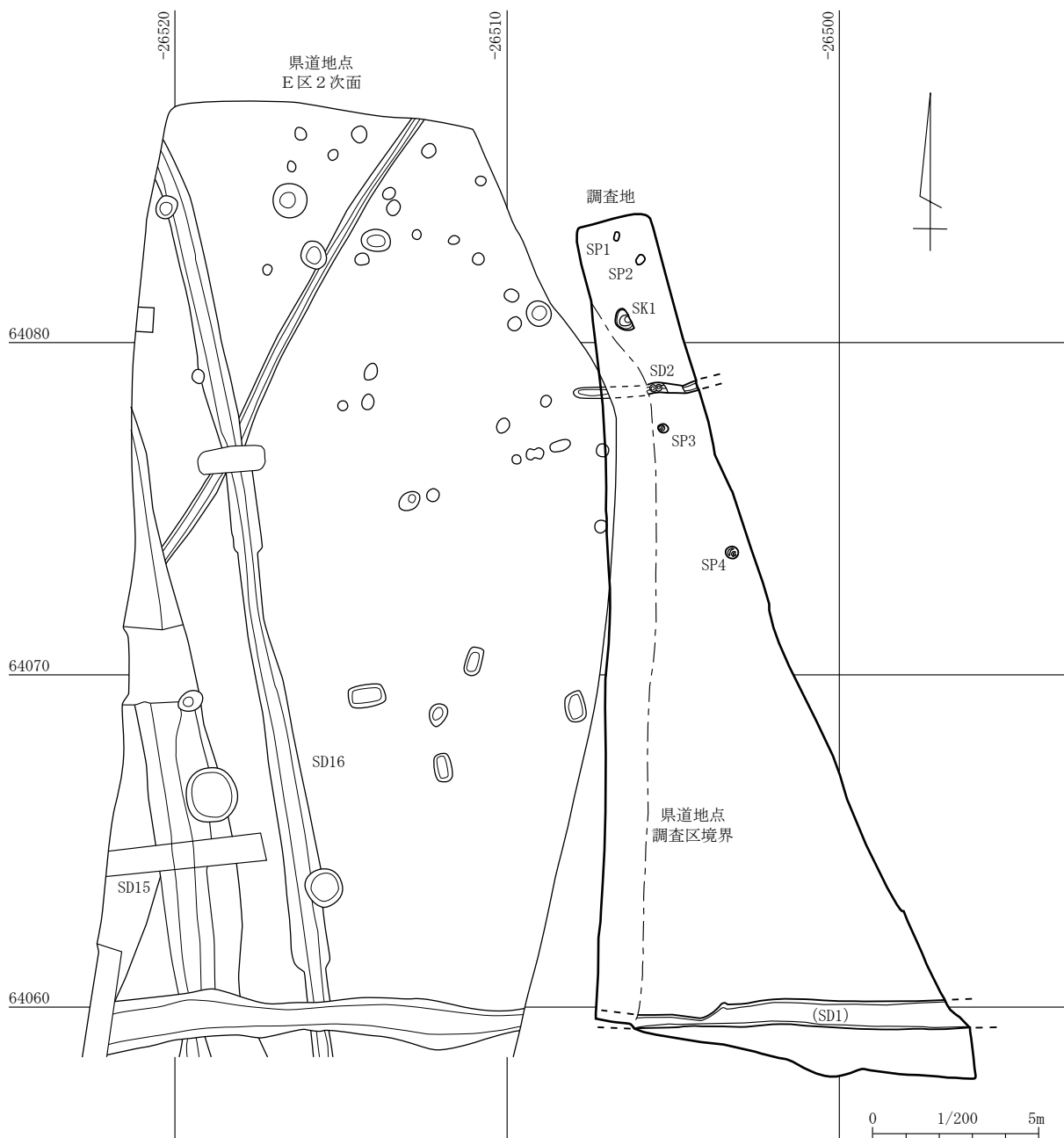


図6 2次面全体図

出し、このうちSD2は県道地点2次面検出溝（調査時名称SD3、詳細未報告）と同一遺構である。いずれも出土した遺物量が僅少で時期の限定は難しい。

遺構は調査区北部に偏って分布し、中央から南部は無遺構地帯である。県道地点と合わせると、両地点を斜めに結ぶラインを境に東西で遺構の有無が明確に分かれ、少なくとも平安時代初頭を下限とする時期では本調査区から東側に集落が展開しないと思われる。

### 3次面の概要

弥生時代中期後半の遺構面である。調査区北側の標高347.6m付近を最高点として南東方向へわずかな下り勾配が認められる。土坑3基・溝2条・小穴10基を検出し、このうちSK3は県道地点3次面検出土坑（調査時名称SK5、詳細未報告）と同一遺構である。

遺構分布の粗密は、農協地点から県道地点、そして本調査地へと次第に疎らになり、SD3を境に東側で途切

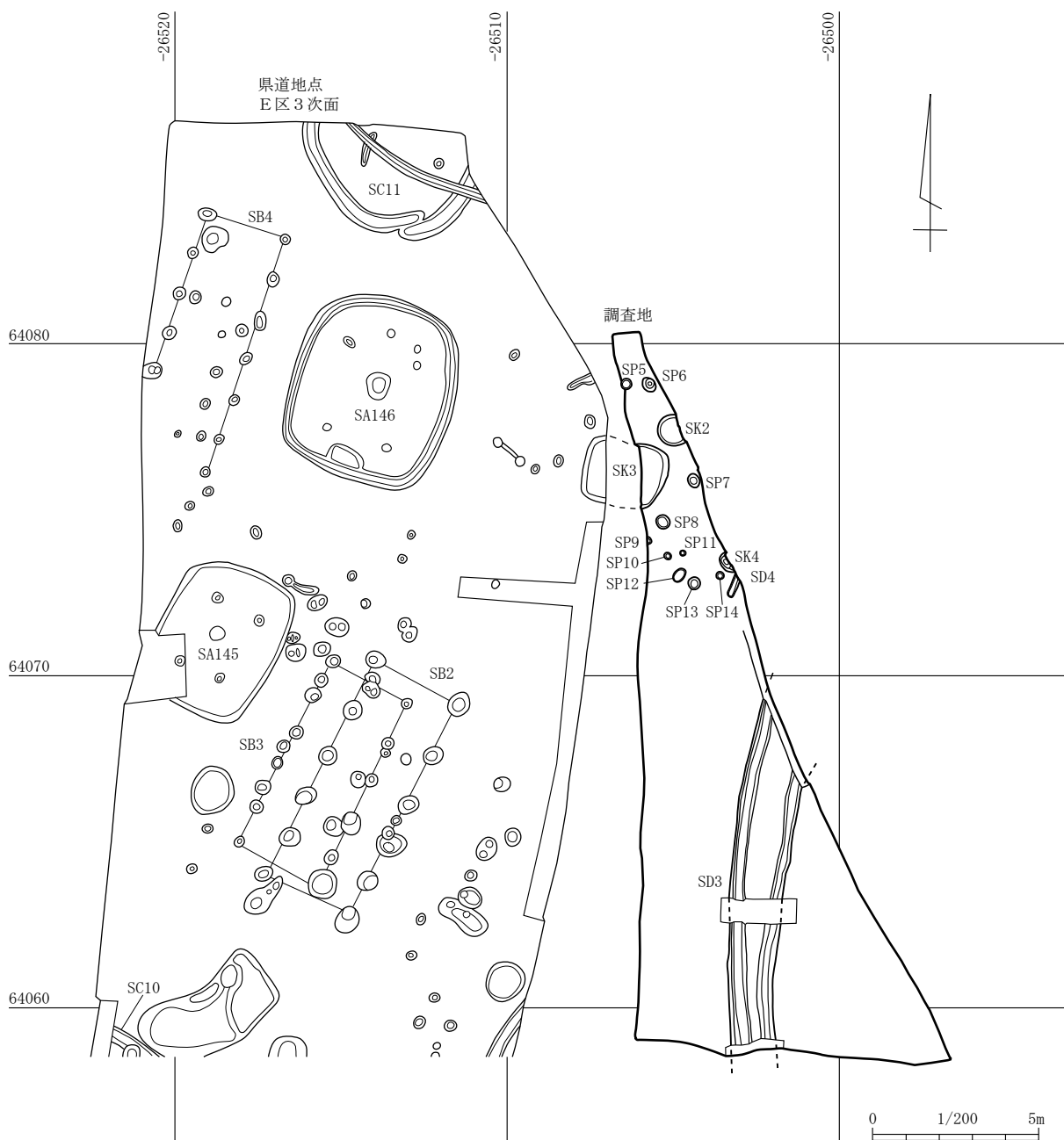


図7 3次面全体図

れる状況が看取される。遺構面の傾斜とそれに伴う包含層の厚みの減少も考え合わせれば、本地点は該期集落の縁辺部に位置していると考えられる。SD3については、高速道地点における囲郭施設のひとつである布掘り溝の機能が想定される。

表1 遺構一覧表

遺構名	遺構面	時期	遺 構			土器		その他遺物	
			平面形	規模 (残存値)	県道地点 対応遺構	重量 (g)	実測	種別	実測
SA1	1次面	平安	方形	長軸 5.90m 短軸 (2.70m) 深さ 45cm		3,887	10	瓦	1
SA2	1次面	平安	長方形	長軸 4.20m 短軸 3.70m 深さ 30cm	E区1次面SA8	447	2		0
SD1	1次面	平安	-	長さ (27m) 幅 1.55~2.10m 深さ 50cm~60cm	E区2次面SD2	1,052	6		0
SK1	2次面	奈良~ 平安	楕円形	長径 60cm 短径 (45cm) 深さ 20cm		0	0		0
SD2	2次面	奈良~ 平安	-	長さ (3.75m) 幅 25~30cm 深さ 5~10cm	E区2次面SD3	0	0		0
SP1	2次面	奈良~ 平安	長方形	長辺 0.30m 短辺 0.20m 深さ 0.05m		0	0		0
SP2	2次面	奈良~ 平安	楕円形	長径 30cm 短径 25cm 深さ 5cm		0	0		0
SP3	2次面	奈良~ 平安	円形	径 30cm 深さ 25cm		0	0		0
SP4	2次面	奈良~ 平安	円形	径 40cm 深さ 30cm		0	0		0
SK2	3次面	弥生	円形	径 (1.00m) 深さ 10cm		12	0		0
SK3	3次面	弥生	隅丸長方形	長辺 1.90m 短辺 1.40m 深さ 20cm	E区3次面SK5	1,764	11		0
SK4	3次面	弥生	楕円形	長径 70cm 短径 (25cm) 深さ 20cm		9	0		0
SD3	3次面	弥生	-	長さ (11.10m) 幅 1.40~1.70m 西:幅 45~55cm 深さ 20cm 東:幅 30~50cm 深さ 5cm		1,205	5	石器	1
SD4	3次面	弥生	-	長さ (60cm) 幅 20cm 深さ 5cm		0	0		0
SP5	3次面	弥生	円形	径 30cm 深さ 15cm		0	0		0
SP6	3次面	弥生	楕円形	長径 50cm 短径 35cm 深さ 30cm		0	0		0
SP7	3次面	弥生	楕円形	長径 40cm 短径 35cm 深さ 15cm		7	0		0
SP8	3次面	弥生	円形	径 40cm 深さ 15cm		0	0		0
SP9	3次面	弥生	円形	径 (25cm) 深さ 15cm		0	0		0
SP10	3次面	弥生	円形	径 20cm 深さ 10cm		0	0		0
SP11	3次面	弥生	円形	径 20cm 深さ 20cm		0	0		0
SP12	3次面	弥生	楕円形	長径 50cm 短径 30cm 深さ 10cm		0	0		0
SP13	3次面	弥生	円形	径 40cm 深さ 15cm		0	0		0
SP14	3次面	弥生	円形	径 25cm 深さ 25cm		0	0		0

## 第2節 遺構と遺物

### (1) 弥生時代の遺構と遺物

#### SK3

3次面北端部の西壁際に位置する。位置関係から県道地点E区3次面検出土坑（調査時名称SK5、詳細未報告）と同一遺構と判断される。平面形は東西方向に軸をもつ不整な隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸1.4mである。断面形は浅い皿形で、検出面からの深さは最深で20cmを測る。覆土中には炭・焼土粒を多く含んでいた。

遺物は、本調査地のみで計測で土器が1764g出土し、今回調査した該期遺構では最も多い。壺（1・2・6～8）、甕（3～5・9～11）の11点を図示した。このうち1～4は床面より出土している。壺の施文は、頸部や胴部を沈線により

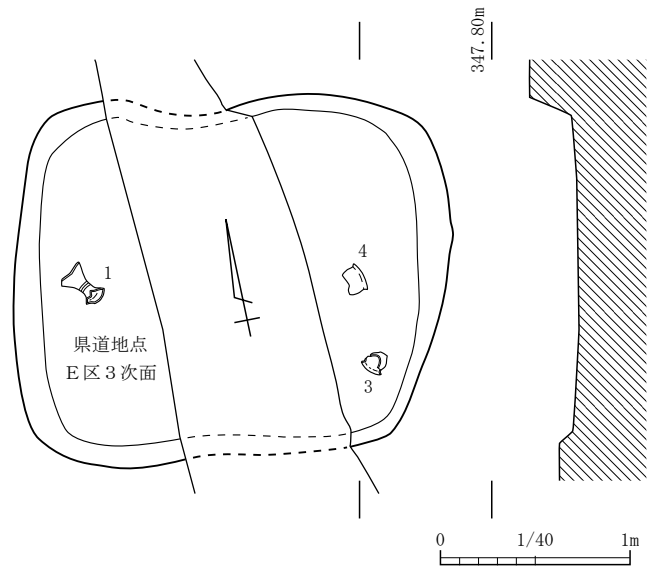


図8 SK3実測図

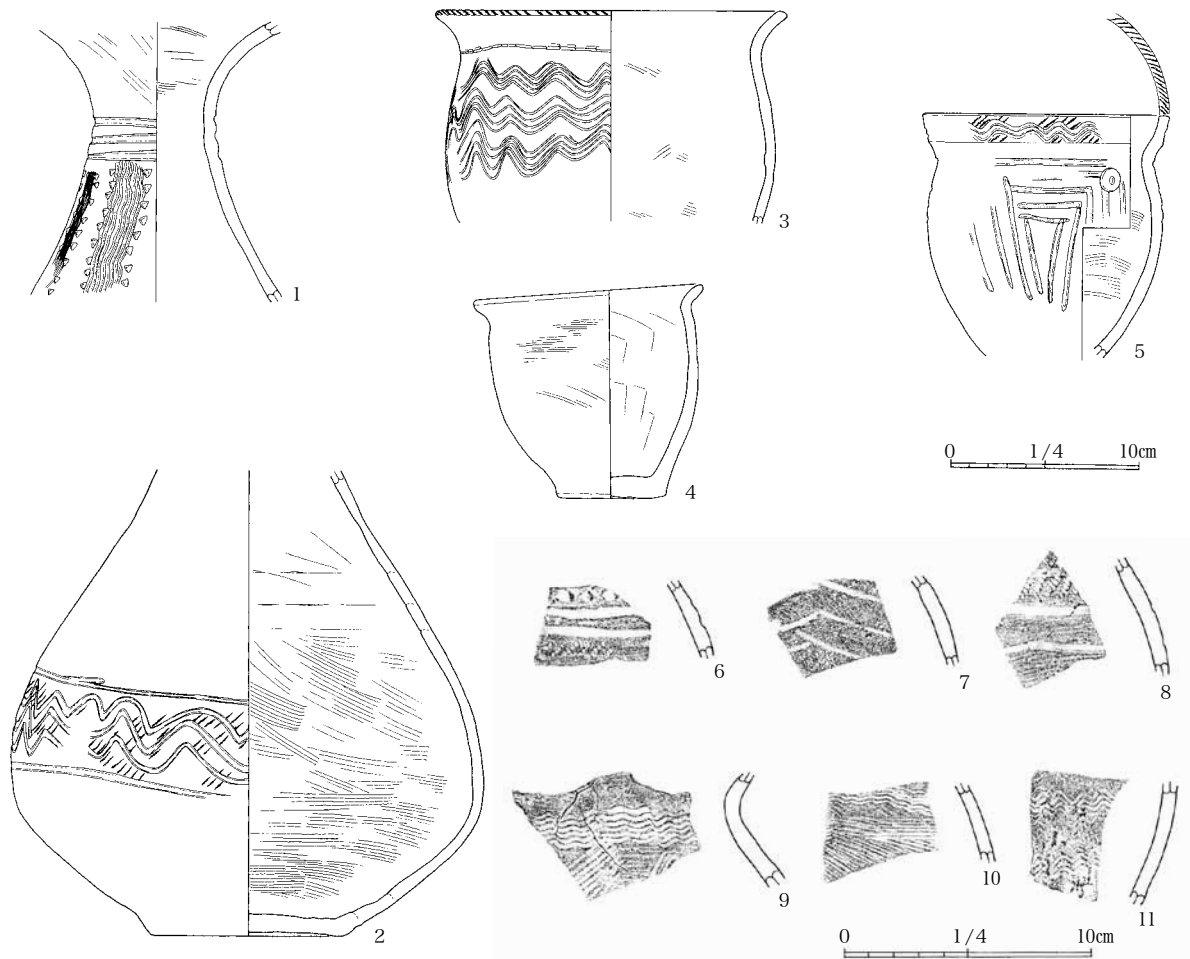


図9 SK3遺物実測図

区画したのちに列点文や縄文で内部を充填するものが多い。1の胴部上位は7単位の懸垂文で、垂下文は2条の櫛描波状文、区画は列点文である。2の胴部中位には、沈線区画の内部に3条の波状沈線を巡らしたのち縄文を粗く充填している。内面には粘土紐の接合痕が残る。甕の口唇部は1・5のように縄文が施文されるのが基本であるが、出土資料中には縄文施文の上からヘラ状工具で刻み目を入れたものも確認された。胴部の文様は、縦方向の羽状文(9・10)と波状文(3・11)の2種が認められる。3は頸部に等間隔止簾状文、胴部に波状文が施され、実測図には表現されていないが櫛描直線文による垂下文で4単位の区画している。4はほぼ完形の小型品で無文である。5は受口状の口縁部に縄文を施文したのち櫛描波状文を施す。胴部はコの字重ね文で円形浮文が貼付される。文様構成から台付甕の可能性が高い。

**SD3**

3次面の中央から南部にかけて位置するわずかに弧を描く南北方向の溝である。確認長は11.1mで、両端は調査区外に延びる。調

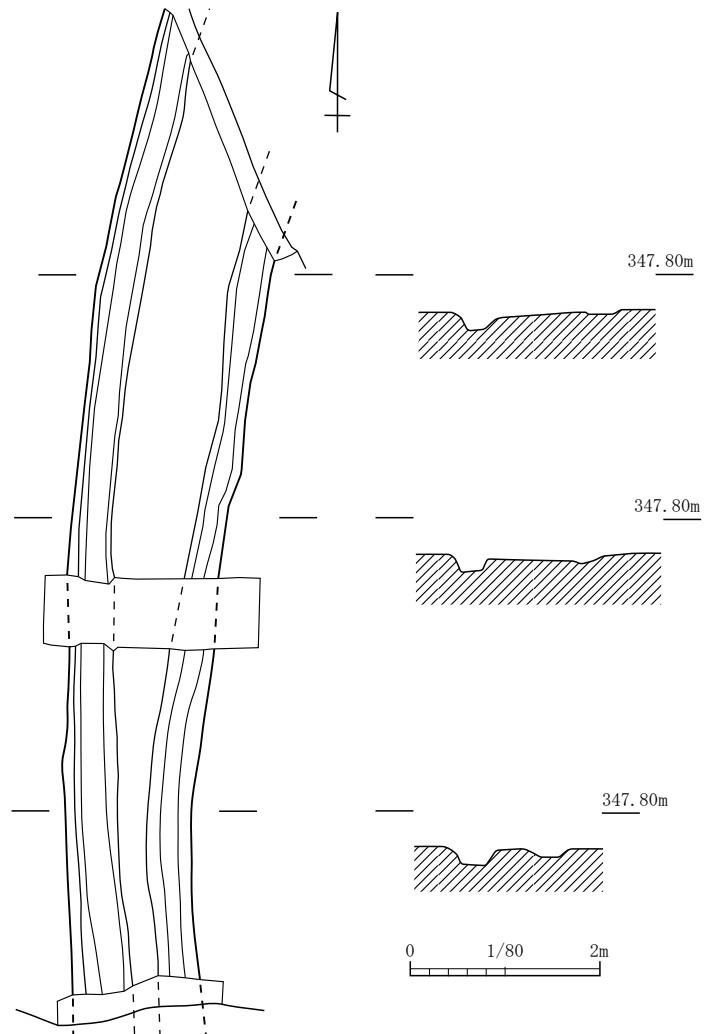


図10 SD3実測図

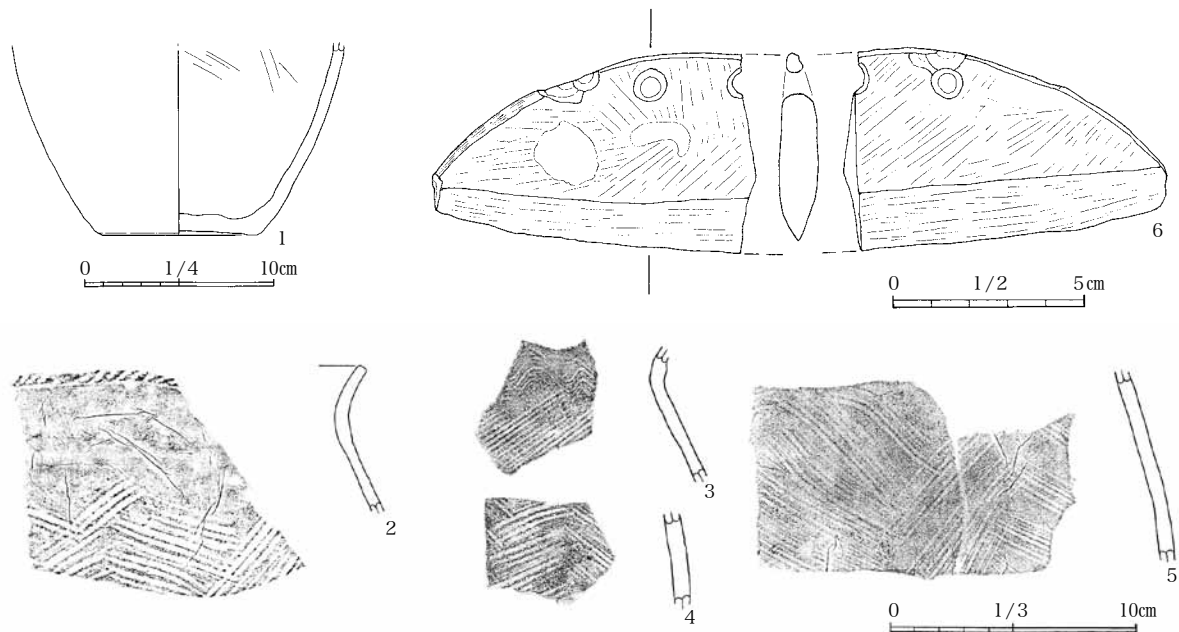


図11 SD3遺物実測図

査時に付した名称のまま1条の溝として報告するが、形態的には検出面よりもわずかに低い高まりを挟んで並行する2条の溝である。幅は全体で1.4~1.7m、西側は45~55cm、東側は30~50cmである。断面形はそれぞれ逆台型を呈し、概ねの深さは西側が20cm、東側が5cmである。こうした弧を描く小規模な溝が密集する状況は高速道地点でも見受けられ、囲郭施設のひとつで垣根等の掘方と考えられる布掘り溝として把握されている。限られた範囲での検出であるが、本遺構も同様の機能を有していた可能性が高い。

遺物は、土器が1205g、石器1点が出土し、このうち甕(1~5)、石包丁(6)の6点を図示した。甕の胴部文様はすべて縦方向の羽状文であるが、出土資料中には波状文も多く認められる。1は胴部下半で、内外面ともハケ調整後、ミガキ調整が施される。6は直線刃半月形の磨製石包丁である。およそ半分を欠損しているが、全長は14cm程度に復元される。輝石安山岩製である。紐かけ穴の縁辺の上方には紐擦れ痕が観察される。

### 弥生時代遺構外出土遺物

2次面と3次面の中間のviii層からx層は弥生時代中期の遺物を含む包含層である。重機掘削時・遺構検出時を合わせておよそ6kgの土器・石器を検出し、このうち壺(1~3・10~19)・甕(4~6・20~27)・台付甕(7)・鉢(8)・高杯(9)・扁平片刃石斧(28)・刃器(29)の29点を図示した。壺の頸部は沈線区画の内部を縄文(2)や簾状文(10)で充填する。胴部は沈線文が多用される。18・19は重三角文である。甕の胴部文様は縦方向の羽状文が主体であるが、波状文を主文様とする4もある。4はix層もしくはx層中からまとまって破片が見つかった(写真6)。受口状の口縁部は丸くおさめられ、口唇部への縄文施文はない。外面の波状文は口縁部から胴部下半まで施されている。また、剥離している箇所があるものの、口縁部及び胴部には円形浮文が互い違いに5ヶ所ずつ貼付されている。8は無文で、内外面は赤彩される。口縁部付近では、未完の焼成後穿孔の痕跡である1対のくぼみが内外面それぞれに認められる。同じく赤彩の鉢で、外面の口縁部直下に突起が貼付された破片資料も確認される。28は刃部を欠く破損品である。全体が研磨され、側面に摩擦・光沢痕が認められる。石材は砂岩である。29は小型剥片に2次加工を施して刃部を作出したものである。石材は粘板岩である。



写真6 弥生時代中期包含層土器出土状況

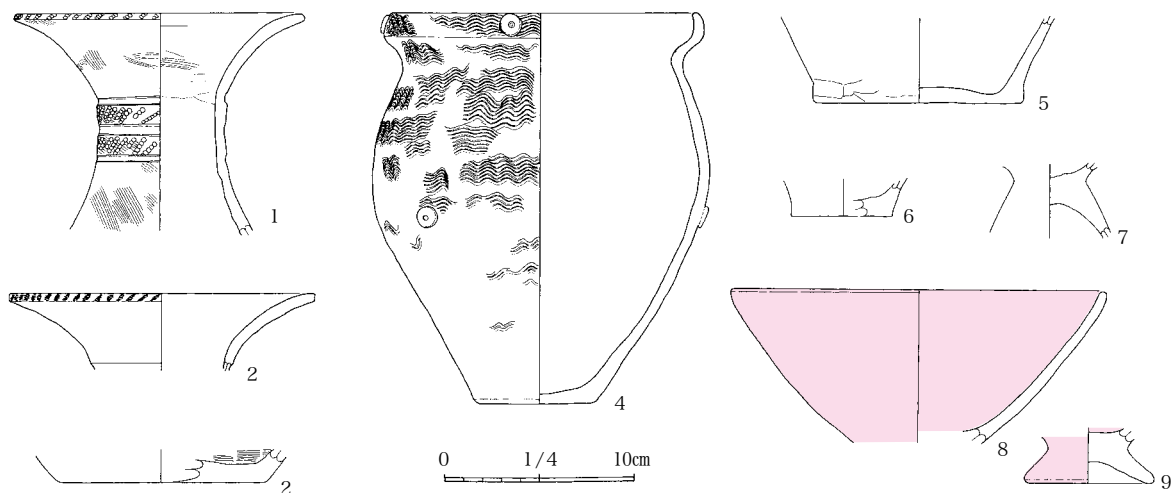


図12 弥生時代遺構外出土遺物実測図(1)

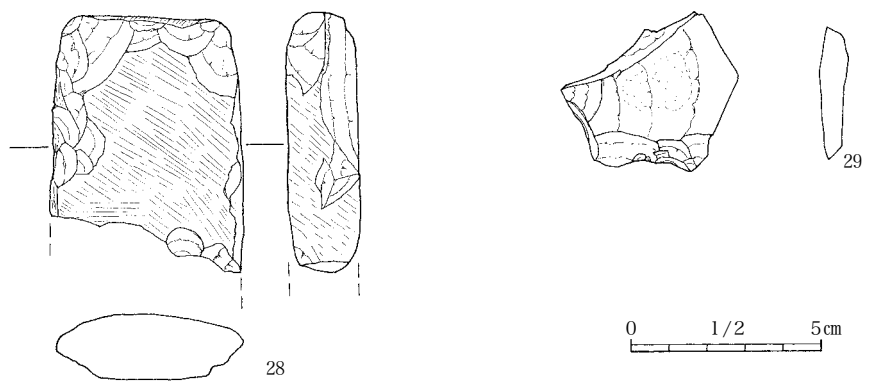
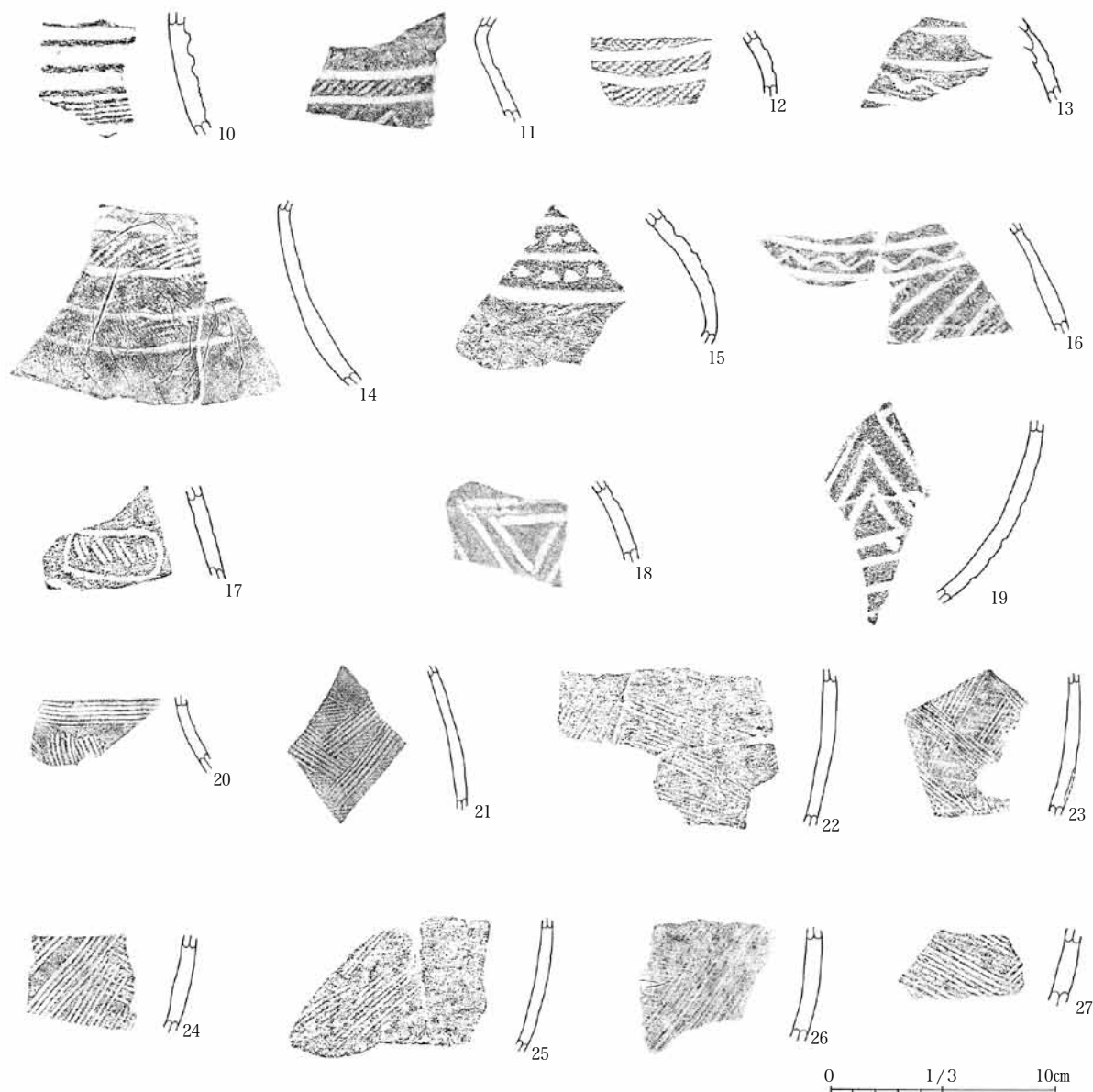


图13 弥生时代遺構外出土遺物実測図(2)

(2) 平安時代の遺構と遺物

SA 1

1次面の中央東壁際に位置する。東側が調査区外にあり全形は確認できていないが、平面形は方形もしくは長方形と推定される。1辺の長さは5.9mで、南北方向軸はN-23°-Eを指す。壁面は床面から直線的に立ち上がり、検出面からの深さは約45cmを測る。床面は平坦で硬化面は認められない。覆土内に若干の焼土塊は含まれていたもののカマドやその痕跡は認められず、調査区外にあると推定される。ピットは3基確認されたが、いずれも深さは10cmに達せず、位置から判断しても支柱穴にはならない。

遺物は、3887gの土器のほか瓦が出土し、瓦(1)、土師器の杯(2~5)・椀(6・7)・甕(8~11)の11点を図示した。1は丸瓦で、南壁付近の床面直上から焼土粒と共に出土した。上端・下端は欠損しているが、径に違いがあることから無段式と考えられる。外面はケズリ・ナデ調整が丁寧に行われ、叩き原体は確認できない。内面には布目痕が明瞭に残

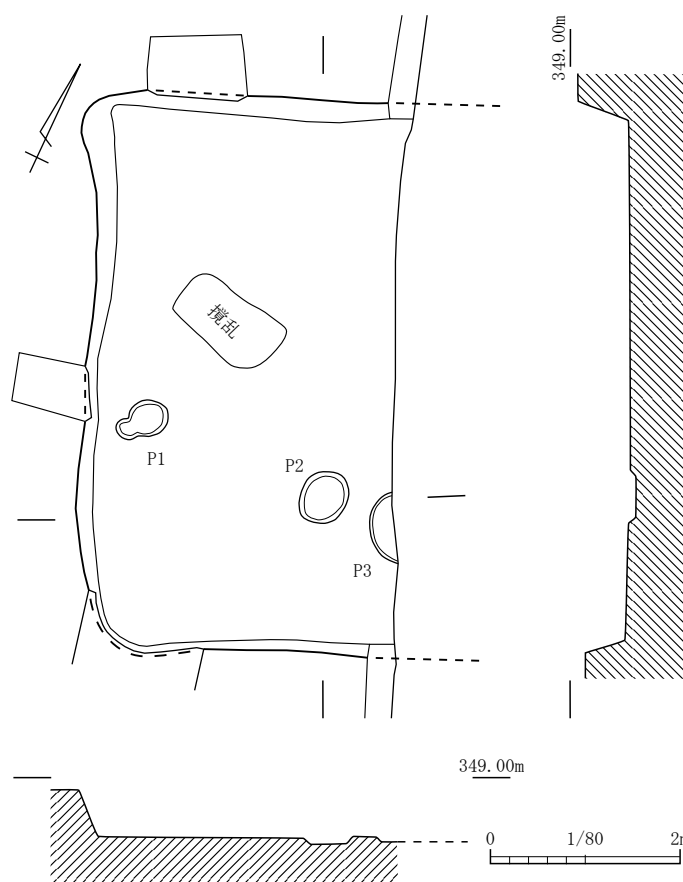


図14 SA 1 実測図

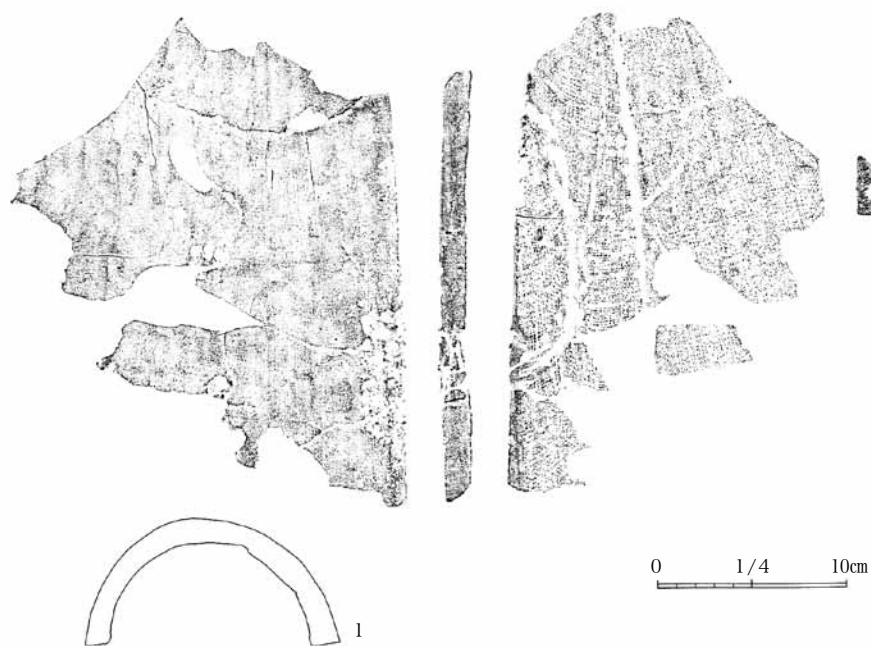


図15 SA 1 遺物実測図 (1)



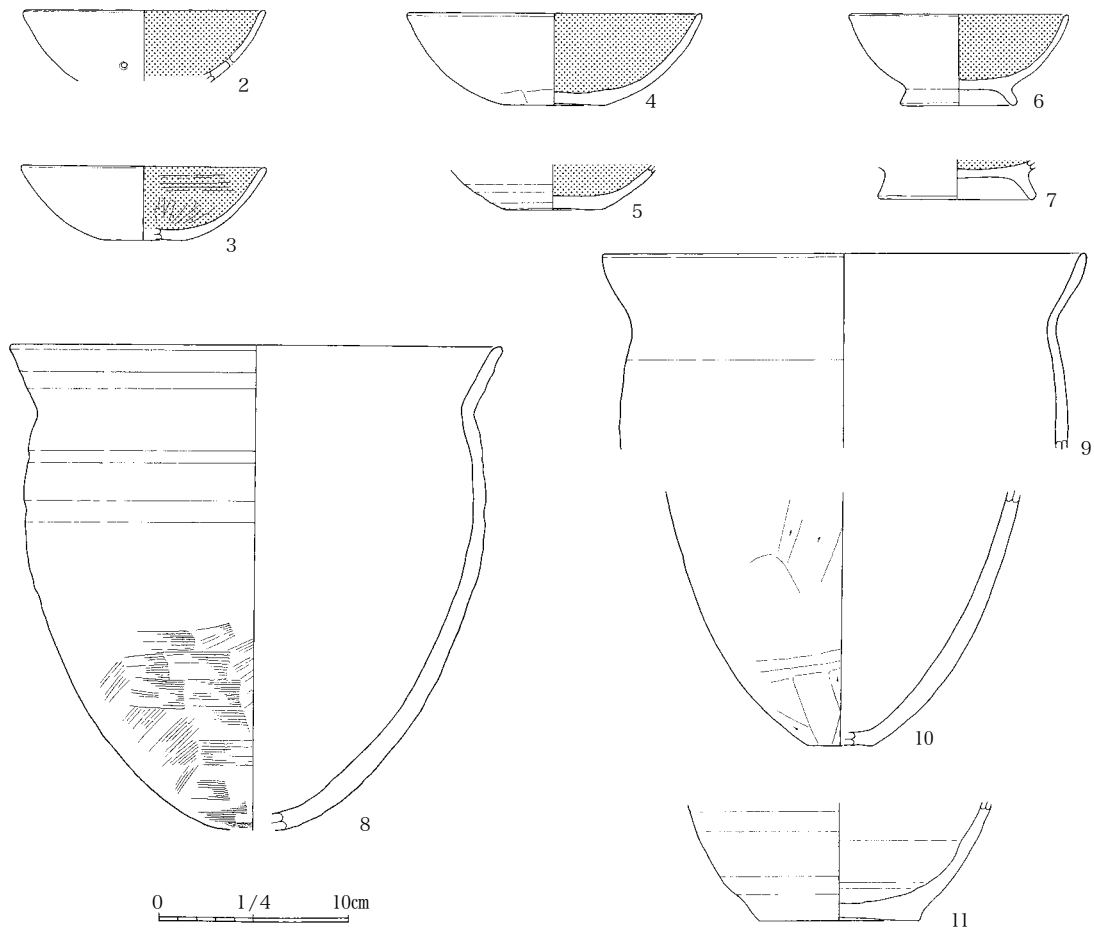


図16 SA1遺物実測図(2)

る。半裁後の側面は未調整である。杯・碗の内面は黒色処理され、ミガキ調整が施される。2の体部下半にある穿孔は焼成後に行われている。7は長胴の甕である。北西コーナー付近で若干の焼土塊と壁面に入り込んだ土器の集積が認められ、カマドの存在を考慮してサブトレンチを設定した際に出土したものである。結果的にカマドの痕跡は認められなかったことから、v・vi層の古代包含層に含まれる遺物と判断した。

**SA2**

1次面北端部の西壁際に位置する。位置関係から、県道地点E区1次面SA8と同一遺構であると判断

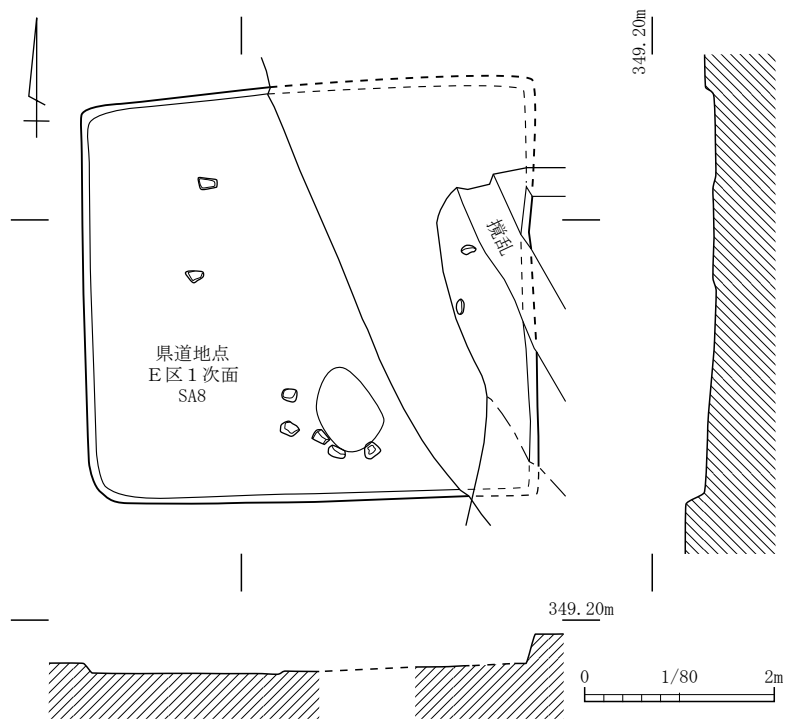


図17 SA2実測図

される。県道地点検出分と合わせると、平面形は長軸4.2m、短軸3.7mの長方形で、東西方向軸はN-89°-Eを指す。北西及び南東の隅周辺は調査区外で未検出である。検出面からの深さは約30cmである。床面は平坦で硬化面は認められなかった。カマドや焼土・炭化物などは確認されていないことから未調査範囲に存在することが予想されるが、床面には複数の礫が広範囲に点在しており、破壊されたカマドの芯材が散らばっている状況を想起させる。住居内には柱穴を確認できなかった。

遺物は少量で土器が447g出土した。図示できたのは土師器の碗(1)・甕(2)の2点である。2はロクロ成形で、胴部下半は縦方向にケズリ調整される。その他の破片資料として、須恵器・灰釉陶器などがある。

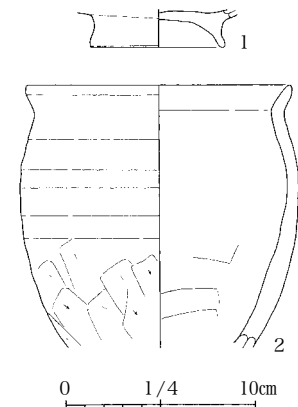


図18 SA 2 遺物実測図

### SD 1

1次面南壁寄り検出された直線的に延びる東西方向の溝である。位置関係から、県道地点E区2次面検出溝(調査時名称SD 2、詳細未報告)と同一遺構と判断される。両地点を合わせた確認長は27mで、両端は調査区外に延びる。幅は1.55~2.1mであるが、県道地点では下層遺構面から検出しているため若干狭まる。断面形は一方に比高10cmの低い段を有する碗形で、検出面からの深さは50~60cmを測る。覆土上層には炭・焼土を含む。

遺物は本調査地分のみ計測で1052g出土し、土師器の杯(1)・甕(2・3)・羽釜(4)、灰釉陶器(5)、白磁の碗(6)の6点を図示した。このうち、2・4は県道地点より出土した資料である。1は非ロクロ成形で、体

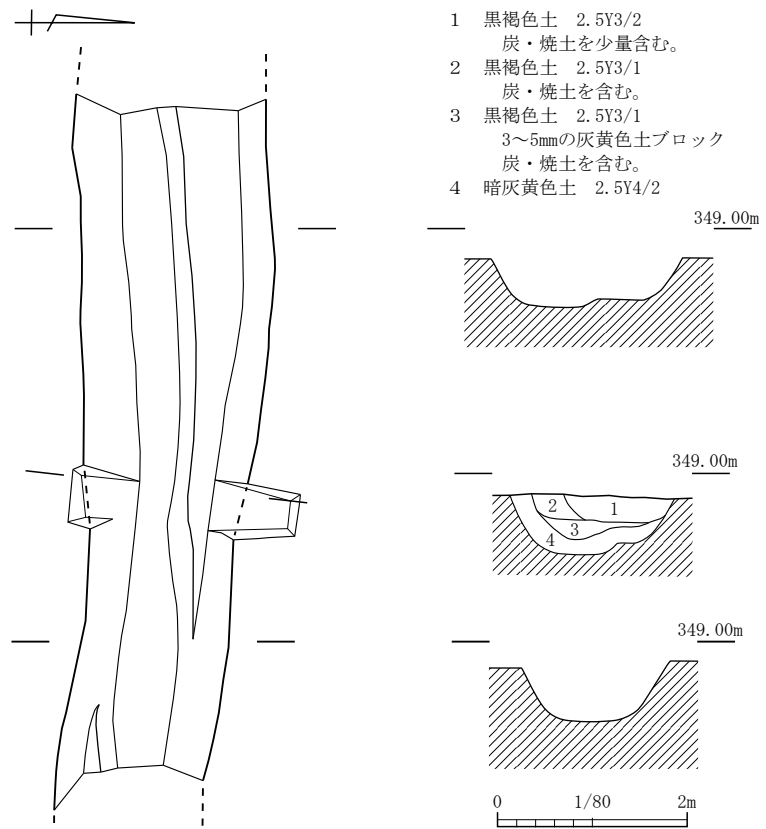


図19 SD 1 実測図

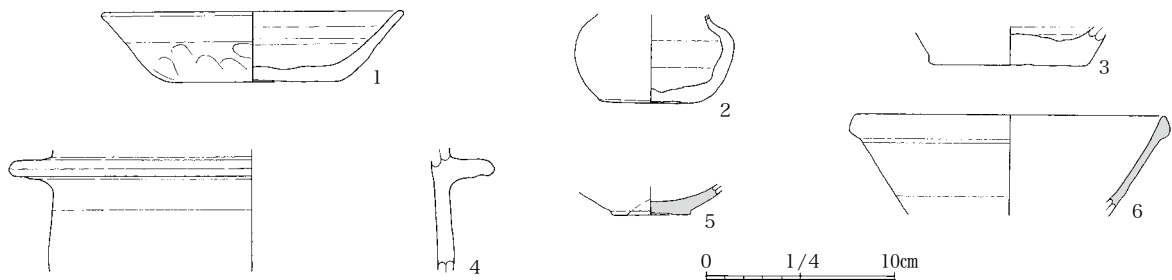


図20 SD 1 遺物実測図

部下半の内外面を指で押さえたのち粗くナデ調整を行う。2は小型の甕で、ロクロ成形ののち胴部上半にミガキ調整、胴部下半にケズリ調整を行う。5は内外面に施釉された底部片である。高台は付かず耳皿と推測される。6は玉縁碗で、小片であるが口径16.2cmに復元される。外面の施釉は腰まで行われている。

#### 平安時代遺構外出土遺物

該期の遺物は1次面・2次面から出土しているが、2次面からの出土量は僅少である。土師器の杯（1～3）、灰釉陶器の皿（4・5）の5点を図示したが、すべて1次面から出土したものである。1はロクロ成形で、外面のナデ痕と底部の回転糸切り痕が明瞭に残る。内部はミガキ調整である。4は東壁沿いに設けた遺構確認トレンチから須恵器の大甕と一緒に出土したもので、体部の1/3程を欠く。共にSA1の範囲内から検出されたと思われるが、出土位置の記録がないことから遺構外の出土遺物として報告する。刷毛塗りで施釉されており、9世紀末から10世紀初頭の所産と推定される。



図21 平安時代遺構外出土遺物実測図

表2 土器観察表

No	種別	器種	遺存度	層位	色調	調整	文様等
S K 3							
1	弥生	壺	頸部1/1	床面	灰黄褐	外面:ハケ→ミガキ 内面:ハケ→ミガキ・ナデ	横走沈線文・懸垂文7単位(2条櫛描波状文・列点文により区画)(県道地点出土)
2	弥生	壺	胴~底部1/2	床面	にぶい橙	外面:ミガキ 内面:ハケ→ナデ・板状工具ナデ 底部:ミガキ	横走沈線文で区画 内側に波状沈線文→縄文 外面:黒班(県道地点出土)
3	弥生	甕	口縁部1/2	床面	にぶい褐	外面:口縁部-ヨコナデ 内面:ハケ→ミガキ	口唇部-縄文 頸部-等間隔止簾状文 胴部-櫛描波状文→垂下文4単位
4	弥生	甕	完	床面	にぶい黄褐	外面:ハケ 内面:板状工具ナデ 底部:指ナデ	外面:黒班
5	弥生	甕	胴部1/6	覆土	褐灰	内面:ハケ→ミガキ	口唇部-縄文 口縁部-縄文→櫛描波状文 胴部-コの字重ね文・円形浮文(県道地点出土)
6	弥生	壺	胴部片	覆土	橙	外面:ハケ	列点文・横走沈線文・縄文
7	弥生	壺	胴部片	覆土	にぶい黄橙	外面:ハケ	連弧文・縄文
8	弥生	壺	胴部片	覆土	橙	外面:ハケ 内面:板状工具ナデ	横走沈線文・縄文
9	弥生	甕	頸~胴部片	覆土	にぶい橙	内面:ハケ→ミガキ	頸部-櫛描波状文 胴部-縦羽状文
10	弥生	甕	胴部片	覆土	にぶい黄褐	内面:ミガキ	櫛描波状文・縦羽状文
11	弥生	甕	胴部片	覆土	にぶい黄褐	内面:ミガキ	櫛描波状文
S D 3							
1	弥生	甕	胴部1/2	覆土	にぶい橙	外面:ハケ→ミガキ 内面:ハケ→ミガキ 底面:ナデ	
2	弥生	甕	口縁~胴部片	覆土	橙	外面:口縁部-ヨコナデ 内面:ハケ→ナデ	口唇部-縄文 胴部-縦羽状文
3	弥生	甕	頸~胴部片	覆土	灰黄褐	外面:口縁部-ヨコナデ	頸部-櫛描波状文 胴部-縦羽状文
4	弥生	甕	胴部片	覆土	橙		縦羽状文
5	弥生	甕	胴部片	覆土	にぶい黄褐	内面:ハケ→ナデ	縦羽状文
弥生時代遺構外出土遺物							
1	弥生	壺	口縁部1/2	検出面	橙	外面:ハケ・一部ミガキ 口縁部-ヨコナデ・ハケ 内面:ハケ	口唇部-縄文 頸部-沈線文→縄文
2	弥生	壺	口縁部1/3	検出面	橙	外面:ミガキ 内面:ミガキ	口唇部-縄文 頸部-沈線文
3	弥生	壺	底部1/3	検出面	にぶい橙	外面:ナデ 内面:ハケ 底部:ナデ	
4	弥生	甕	胴部2/3	検出面	にぶい橙	外面:ミガキ 内面:口縁部~胴(上)-ミガキ 底部:ナデ	口縁部~胴-櫛描波状文 口縁部/胴部-円形浮文各5箇所
5	弥生	甕	底部2/3	検出面	橙	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:ナデ	
6	弥生	甕	底部1/2	検出面	暗赤褐	外面:ミガキ 内面:ミガキ 底部:ナデ	
7	弥生	台付甕	脚台部1/2	検出面	橙	外面:ミガキ 内面:ナデ	
8	弥生	鉢	口縁部1/3	検出面	赤	外面:ミガキ 内面:ミガキ	外面:赤彩 内面:赤彩 1対焼成後穿孔1ヶ所(未完)
9	弥生	高杯	底部1/2	Tr	赤	外面:ミガキ 内面:ミガキ 台部:ナデ	外面:赤彩 内面:赤彩
10	弥生	壺	胴部片	検出面	にぶい黄褐		簾状文・横走沈線文
11	弥生	壺	頸~胴部片	検出面	橙		沈線文・縄文・山形文?
12	弥生	壺	胴部片	検出面	黄褐	内面:ナデ	縄文→沈線文 外面:黒班
13	弥生	壺	胴部片	検出面	にぶい黄褐	内面:ハケ→ナデ	横走沈線文・波状沈線文
14	弥生	壺	頸~胴部片	検出面	橙		横走沈線文・縄文
15	弥生	壺	胴部片	検出面	灰黄褐	内面:ハケ→ナデ	横走沈線文・列点文
16	弥生	壺	胴部片	検出面	橙		波状沈線文・横走沈線文・縄文・斜状沈線文
17	弥生	壺	胴部片	検出面	にぶい橙	内面:指ナデ	沈線文の区画内に短斜線文
18	弥生	壺	胴部片	検出面	橙	内面:指ナデ	重三角文
19	弥生	壺	胴部片	Tr	橙		重三角文
20	弥生	甕	頸~胴部片	検出面	橙		櫛描直線文・縦羽状文
21	弥生	甕	胴部片	検出面	灰黄褐	内面:ハケ→ナデ	縦羽状文
22	弥生	甕	胴部片	Tr	灰褐	内面:ハケ→ナデ	縦羽状文

No.	種別	器種	遺存度	層位	色調	調整	文様等
23	弥生	甕	胴部片	検出面	にぶい黄褐	外面:ハケ 内面:ハケ→ミガキ	斜格子文
24	弥生	甕	胴部片	検出面	灰褐	内面:ハケ	縦羽状文
25	弥生	甕	胴部片	Tr	灰褐	内面:ハケ	縦羽状文
26	弥生	甕	胴部片	検出面	にぶい黄褐	内面:ハケ	縦羽状文
27	弥生	甕	胴部片	検出面	灰黄褐	内面:ハケ→ミガキ	縦羽状文
S A 1							
1	瓦	丸瓦	3/4	覆土	にぶい黄橙	外面:ケズリ→ナデ 内面:布目痕・布綴じ痕	
2	土師	杯	口縁部1/4	覆土	にぶい橙	ロクロナデ 内面:ミガキ	内面:黒色処理 焼成後穿孔1ヶ所
3	土師	杯	体部1/3	覆土	にぶい褐	ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転糸切り	内面:黒色処理・暗文
4	土師	杯	体部1/4	覆土	にぶい橙	ロクロナデ 外面:体(下)-静止ケズリ 内面:ミガキ 底部:静止ケズリ	内面:黒色処理
5	土師	杯	底部1/2	覆土	にぶい橙	ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転糸切り	内面:黒色処理
6	土師	椀	体部2/3	覆土	橙	ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転糸切り→回転ナデ	内面:黒色処理
7	土師	椀	台部1/2	覆土	橙	ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転糸切り→回転ナデ	内面:黒色処理
8	土師	甕	胴部1/3	覆土	橙	ロクロナデ 外面:胴(下)-強いハケ 内面:胴(下)-指ナデ	外面:黒斑
9	土師	甕	口縁部1/4	覆土	にぶい橙	ロクロナデ	
10	土師	甕	胴部1/2	覆土	にぶい褐	外面:ケズリ 内面:板状工具ナデ 底部:ナデ	外面:カマド固定土附着
11	土師	甕	底部1/1	覆土	黒	ロクロナデ 底部:回転糸切り	
S A 2							
1	土師	椀	底部1/1	覆土	橙	ロクロナデ 内面:ミガキ 底部:回転ナデ	
2	土師	甕	胴部2/5	覆土	にぶい黄橙	ロクロナデ 外面:胴(下)-ケズリ 内面:胴(下)-板状工具ナデ	外面:黒斑 (県道地点出土)
S D 1							
1	土師	杯	体部1/6	覆土	橙	ヨコナデ 外面:指オサエ→ナデ 内面:指オサエ→ナデ 底部:ケズリ	
2	土師	甕	胴部1/1	覆土	にぶい橙	ロクロナデ 外面:ミガキ 胴(下)-ケズリ 内面:ヨコナデ 底部:ミガキ	底部:黒斑 (県道地点出土)
3	土師	甕	底部3/4	覆土	橙	外面:ナデ 内面:強めのロクロナデ 底部:回転糸切り	
4	土師	羽釜	鏝部1/8	覆土	橙	ロクロナデ 外面:胴(下)-ケズリ	(県道地点出土)
5	灰釉	耳皿	底部1/3	覆土	浅黄		外面:灰釉 内面:灰釉
6	白磁	碗	口縁部1/6	覆土	灰白・灰黄		外面:釉 内面:釉
平安時代遺構外出土遺物							
1	土師	杯	底部1/1	攪乱	にぶい橙	ロクロナデ 底部:回転糸切り	
2	土師	杯	底部2/3	検出面	にぶい黄橙 褐灰	ロクロナデ 底部:回転糸切り→ナデ	
3	土師	杯	底部1/1	検出面	橙	ロクロナデ 底部:回転糸切り	
4	灰釉	皿	全体2/3	Tr	灰白	ロクロナデ 底部:回転糸切り	外面:灰釉 内面:灰釉 刷毛塗り
5	灰釉	皿	底部1/3	検出面	にぶい黄橙	ロクロナデ	外面:灰釉 内面:一部灰釉

表3 石器観察表

No.	種別	石材	計測値(残存値)				残存率	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
SD3								
6	磨製石包丁	輝石安山岩	(8.5)	5.3	1.1	(63.92)	1/2	半分欠損・穿孔2箇所
弥生時代遺構外出土遺物								
28	扁平片刃石斧	砂岩	(6.6)	5.0	1.8	(104.52)	基部	刃部欠損
29	刃器	粘板岩	3.8	4.8	0.8	15.85	完形	

## 引用・参考文献

- 長野市教育委員会 1991 『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第51集
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集
- 長野市教育委員会 1993 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.3
- 長野市教育委員会 1994 『松原遺跡Ⅳ』長野市の埋蔵文化財第63集
- 長野市教育委員会 1996 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.6
- 長野市教育委員会 1998 『松原遺跡Ⅴ』長野市の埋蔵文化財第92集
- 長野市教育委員会 2014 『長野市埋蔵文化財センター所報』No.25
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』4 一長野市内その2— 松原遺跡 縄文時代
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論4 弥生中期・土器図版
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論6 弥生後期・古墳前期
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論2 弥生中期・遺構図
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論1 弥生中期・遺構本文
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論5 弥生中期・石器本文
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論5 弥生中期・石器その他(付図・付録)
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論7 弥生時代・考察 検索
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』5  
一長野市内その3— 松原遺跡 弥生・総論8 総論・自然科学分析
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』6  
一長野市内その4— 松原遺跡 古代・中世 図版編
- (財)長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』6  
一長野市内その4— 松原遺跡 古代・中世 本文編

# 写真図版

図版 1



1次面全景（南西より）



2次面全景（南西より）





3次面全景（南西より）



調査区東壁土層断面（西より）

図版 3



SK3 完掘 (南東より)



SD3 完掘 (南より)



3次面弥生時代中期遺構群 (北より)



2次面奈良時代末～平安時代中期遺構群 (西より)



SA1 完掘 (南より)



SA2 完掘 (南より)



SD1 完掘 (東より)



SD1 土層断面 (東より)

S K 3 出土遺物



S D 3 出土遺物



弥生時代遺構外出土遺物 (1)



図版 5

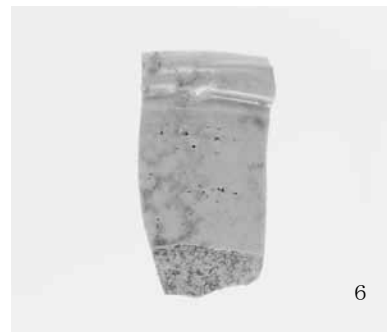
弥生時代遺構外出土遺物 (2)



SA 1 出土遺物



SD 1 出土遺物



平安時代遺構外出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな	まつばらいせき
書名	松原遺跡 (6)
副書名	国道403号線東寺尾交差点改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第141集
編著者名	清水竜太・日下恵一・飯島哲也
編集機関	長野市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2015 (平成27) 年10月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
まつばらいせき 松原遺跡	ながのけんながのしまつしろまち 長野県長野市松代町 ひがしてらあざたかはた 東寺尾字高畑	20201	F-026	36° 57' 71"	138° 20' 38"	2014. 8. 4 ～2014.10.10	240m <sup>2</sup>	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松原遺跡	集落	弥生時代中期	土坑 3基 溝 2条 小穴 10基	弥生土器 石包丁 扁平片刃石斧				
		奈良時代末～ 平安時代中期	住居跡 2軒 土坑 1基 溝 2条 小穴 4基	土師器 須恵器 灰釉陶器 白磁 瓦				
要約	<p>松原遺跡は、千曲川右岸の自然堤防上に立地する縄文時代から平安時代、中世に至る複合遺跡であり、特に弥生時代中期においては東日本を代表する大規模な集落が形成されている。</p> <p>今回の調査では1次面で平安時代中期、2次面で奈良時代末～平安時代中期、3次面で弥生時代中期の遺構面を確認した。いずれの面においても確認された遺構は少なく、調査地は各時期において集落の縁辺部に位置していたと考えられる。</p>							



長野市の埋蔵文化財第141集

## 松原遺跡(6)

平成27年10月28日 印刷

平成27年10月30日 発行

発行 長野市教育委員会  
編集 文化財課 埋蔵文化財センター  
印刷 ほおずき書籍株式会社

